

「事実の証人」 —使徒行伝講解説教 13—

使徒言行録

第5章 12節～32節

説教 本庄侑子 牧師

聖霊が降り教会が誕生して間もない頃、その祈りに生かされる群れの出現は、多くの人たちの心を捉えました。洗礼を受け、古い自分が葬り去られ、新しい命に解放されたキリスト者たちの姿や生活を通して、死を打ち砕いて復活されたキリストが、力強くお働きになったからです。

神様が、独り子イエス様を地上へと遣わして、私たちの罪の贖いとして十字架につけられたこと、その計り知れない神様の愛と哀れみと赦しに、感謝の祈りを捧げて生きる群れの姿。与えられた新しい命が、神のご計画のために用いられることを祈り求めて生きる群れの姿。断ち切れない自分勝手な思いや行いを悔いて、主イエスキリストの十字架の愛によって、日々新しく造り変えられることを願う群れの姿。そして何よりも、すべてのひとに、本当に無くてはならぬ「命の言葉」が宣べ伝えられるために祈って生きる群れの姿。そのような人たちを通して現れ出ている不思議な出来事の数々。そんな教会の姿を、人々は賞賛していたのです。

しかし同時に、自分が抱くあらゆる思いのすべてをご存知である神様の前に、繰り返し立たされながら生涯を生きることへの恐れも、人々は感じていたことでしょう。それでもなお、神様の力強いお働きと愛の力によって、多くの男女が祈りの群れに加えられていったのです。

そんな中、教会を新たな試練が襲いました。ペトロとヨハネのみならず、使徒たちの全員が捕まってしまったのです。以前、捕らえられたペトロとヨハネが、釈放されて教会に帰った時、それを聞いた人たちは、困難の中でも「思い切って大胆に」、なすべきことを行わせて下さいと祈りました。彼らがなすべきこと、それは御言葉を宣べ伝え続けることです。そして、各々が遣わされている場所で、困難の中でこそ、他の何によるのでもなく、御言葉に支えられて、生かされ続けることです。そのような彼らを通して、イエス様が彼らの隣人と出会い、御手を伸ばして癒し、救いへと導いて下さることを彼らは祈りました。

今回、使徒たちの全員が捕らえられるという以前よりもさらに大きな困難の中でも、彼らは同じように祈ったはずです。そして、神はその祈りを聞かれました。主の天使を遣わして、牢の戸を開け、使徒たちを外に連れ出し、「行って

神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言われたのです。

厳しい現実、戦いの中へと戻って行くことが、神の御心でした。彼らは、すべてを神様にお委ねして、すぐに困難の中に帰って行きました。彼らは逃げませんでした。逃げずに、神の御心に従うことができたのです。その背後には、困難の中でも「思い切って大胆に」、なすべきことを行わせてくださいという教会の祈り、教会の信仰、そして自分たち自身もそのように生きる教会の姿があったのだと思います。

最高法院での尋問においても、使徒たちは自分たちに敵意を向ける人々に、「命の言葉」を語り続けました。その時、人の目には、困難や迫害が、彼らを取り囲んでいるように見えたでしょう。しかし、聖霊をいただいていた、そして、教会の祈りに包まれていた彼らの目には、聖霊がその場を取り囲んで、自分たちに敵意を向けてくる人々に、主ご自身が語ろうとしておられる、その心に触れようとしておられるのが見えていたのだと思います。使徒たちは「命の言葉」を語りました。主なる神は、私たちを罪から救うために、イエス・キリストを遣わして下さいと、私たちの罪をすべてその身に負わせ、十字架につけて下さったこと、そして、死から復活させ天に昇らせ、ご自分の右に上げられたこと、教会が二千年間、変わることも無く、毎週語り続けて来た「命の言葉」を語ったのです。

「わたしたちはこの事実の証人」だと彼らは断言しました。それは確かに、彼らが見た事実だったからです。これは、私たちすべての者に、なくてはならない「命の言葉」であり、確かに神が、この地上で、この歴史の中で、あなたのために起こされた事実なのです。あなたは、それほどまでに神に愛されているのです。

かつて、若くして病を得て、もう先が長くないかもしれないと知らされた、キリスト者の友人が、こう言ったのを思い出します。「これから何十年生きるよりも、たった一日でも、イエスキリストを知って生きる方が幸せ、だから私は大丈夫。」私たちが耳にし、信じ、生かされて来た福音は、すべての人になくてはならない「命の言葉」です。これさえあれば、もう他に何もいらぬと言わしめる程に、尊い「命の言葉」なのです。

(記 説教要約奉仕者)